『仁助咄』にみられる医学

浜田善利

『仁助咄』は天明年間（一七八一～八九）のころに、肥後で書かれた物語である。当時の農村の生活の苦しさを、さまざまな角度から取り上げて、話の中心となる仁助と数人の農民たち、それに村内の医者が加わって、座談の形式をとって描写してある。

話は第一話から第七話まで、計七話があり、何国何郡山中村という設定で、ある年の一月の間に続けられている。

話の主題は、仁助が中心になって、農民の悲惨な生活を述べたものであるが、その話相手になったのが、医者の山村智伯である。そこで話の中には病気や怪我、あるいは医学的なものの考え方が含まれているので、それらを取り上げて検討してみた。

第一話では、陰陽師の話として、時節を説明しているが、これは五日を一候とし、三候を一気とし、（六）気を一時とし、四時つまり二四気を一歳とするもので、傷寒例に説く時節の話である。第二話では、打血の話にことよせて、生活の苦しさを述べている。第四話では、葛根餅について、葛の根は葛根といって薬種につかい、表を発し裏熱をさまし、脾胃を調える薬だとある。また傷寒や瘟疫の話もみえる。第五話では、腰を打ち折ったという病人からの依頼で、その治療に出掛ける。第七話では、四時のめぐりについての説明があり、これは『素問』の四気調神大論に見える。

本書の著者としては、その時代に矢部町に在住した御郡医師の渡辺質（ただす）の名が上げられている。

渡辺質は、安永七年（一七七四）に矢部浜町で生まれ、嘉永元年（一八四八）に七二歳でなくなっている。彼は肥後熊本藩の医学校である再春館の御施薬主も勤めた人で、病人の治療に熱心で、どんな真夜中であろうと、往診を頼まれると必ず出掛けたという。それだけでなく、彼はまた第一級の知識人であり、文化人でもあった。彼が亡くなっ

たのは、嘉永元年一〇月四日で、往診から帰る途中、横野村霧府滝で和歌を考えているうちに、足を滑らせて、滝に転落、死亡したと伝えられている。

（熊本工業大学）

『福岡藩奥御番医亀鑑』について

木下　勤

江戸時代の大名・諸藩は、俗に三百藩といわれているが、幕命により改易・国替えが頻繁に行われたために、時代によってその数に差異があり、江戸後期ではおよそ二百七十藩といわれている。そして各大名家は、その禄高、格式に応じて相当数の藩医を召し抱えていたので、全国的にはかなり多数の藩医がいたと考えられる。浅学にして、その数を正確には知り得ないが、恐らく何百、何千という医師数であったものと思われる。

黒田家福岡藩は、藩祖・黒田長政以来、ほぼ筑前国一円を領する表石高四十七万三千石の外様大藩であった。従って藩医も多く、文化十四年分限帳によると、内科五十六人、小児科十六人、外科二十人、眼科五人、口科三人、針